

# 魚庭(なにわ)の超高級魚(あこう) 資源回復への取組み

水産研究部海域グループ

## ■ 調査研究の概要

大阪で「あこう」と呼ばれるキジハタは大阪湾で漁獲される魚の中では最も高い。

1980年代後半から漁獲量が減少し、1990年代には漁獲はほとんど捕れなくなった。そこで、大阪府が積極的な種苗放流を開始、これに伴う調査および技術開発を行っている。

現在までのところ、放流した種苗は定着性が強く、約3年で漁獲サイズまで成長すること、放流海域で漁獲される個体の約8割が放流魚であることが明らかとなっている。また、種苗生産技術開発も進めており、数万尾の生産が可能となっている。

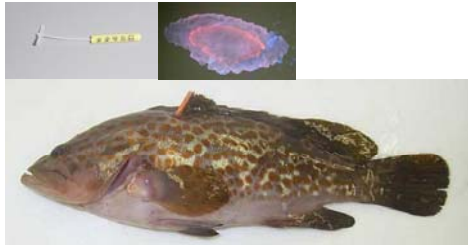
## ■ 調査研究の特徴

- ・ 標識放流による放流効果調査の把握
- ・ 大型水槽を用いて種苗生産技術の開発
- ・ 漁業者と一体となった資源管理の取り組み

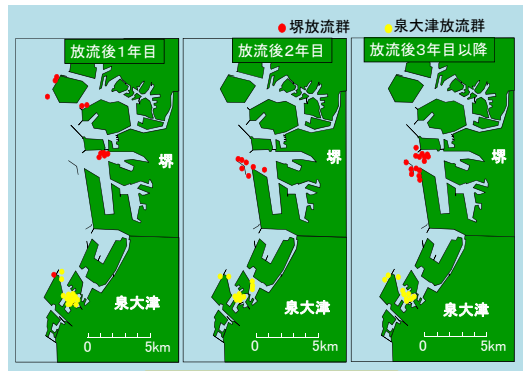
## ■ 活用できる分野

- ・ クエやマハタといった他の高級魚の種苗生産技術
- ・ 種苗放流を利用した水産資源の回復技術
- ・ 漁業者と連携した「魚庭(なにわ)の魚」の付加価値向上

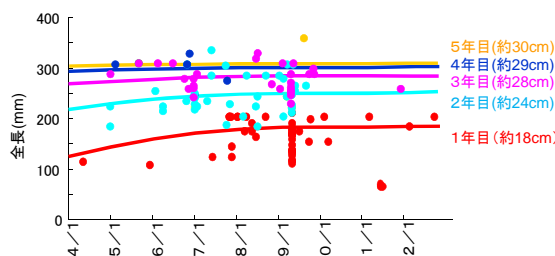
## ■ 調査研究の内容



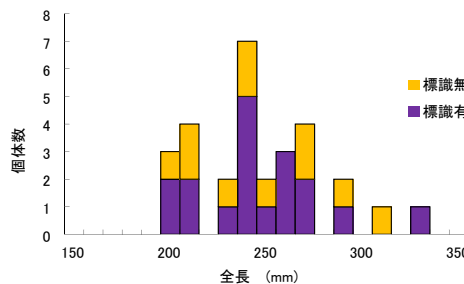
左上:スパゲティ型標識 中上:耳石ALG標識  
下:放流3年後に採捕された個体



放流魚の移動範囲



放流魚の成長



漁獲物に混入する放流魚



上:簡易育成礁  
中:放流の様子  
下:育成礁を利用するキジハタ種苗



左上:孵化仔魚 右上:孵化20日目の仔魚  
下:種苗生産の様子



上:清蒸鮮魚  
左上:湯霜造り  
左:姿造り

# 魚庭（なにわ）の超高級魚（あこう）資源回復への取組み

辻村浩隆（水産研究部）

## 1. 目的

大阪で「あこう」と呼ばれるキジハタは、大阪湾で漁獲される魚の中では最も価格が高いものの一つである。しかしながら、その漁獲量は1980年代後半から減り始め、1990年代にはほとんど捕れなくなった。このため、大阪府では2000年から積極的な資源回復のために種苗放流を行っている。これに伴い当研究所では、種苗生産技術の開発、放流技術開発、放流効果の把握、ならびに効率的な漁獲のための資源管理方策の開発に取り組んでいる。ここでは、現在までの成果の概要について報告する。

## 2. 方法

### (1) 種苗生産

2003～2005年には小型水槽による種苗生産技術開発を行い、2010・2011年には大型水槽による大量種苗生産技術の開発に取り組んだ。

### (2) 放流技術開発および放流効果の把握

ア 2000～2011年に、港湾区域である大阪湾北東海域（堺および泉大津地先）に、標識を付けた10cm種苗を放流し、標識魚の採捕報告をとりまとめて放流効果を調べた。

イ 2009～2012年には、更に効率的な放流方法の開発のため、堺および泉大津地先において、小型種苗(5cm)と大型種苗(10cm)を用いて、簡易育成礁の有無による比較放流試験を行った(新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業)。

ウ 2011年には、自然海岸が広がっている大阪湾南部海域における放流効果を明らかにするため、標識放流を行った。

### (3) 資源管理

今までに得られたデータを元に、資源管理方策を検討した。

## 3. 結果および考察

### (1) 種苗生産

小型水槽における種苗生産技術の開発では、大きな成果が得られなかった。しかしながら、低生残率の原因は仔魚の沈降死であることが明らかになり、大型水槽で試験を行ったところ、数万尾の種苗を生産することが出来るようになった。今後は10万尾規模の安定生産を目標に技術開発を行っていききたい。

### (2) 放流技術開発および放流効果の把握

ア 放流魚の採捕場所をとりまとめたところ、大半が放流海域から数km以内で漁獲されており、非常に定着性が強いことが明らかとなった。また、3年で漁獲サイズである25～30cmに成長することも分かった。放流海域で漁獲されるキジハタの約8割は放流した個体であり、また、回収率も15%前後であり、経済的に考えても効果のある事業であることが明らかとなった。

イ 従来、小型種苗は放流するとほとんど残らなかったが、簡易育成礁設置により生残率が向上する傾向が見られた。ただ、放流方法には更に工夫する余地が残されている。

ウ 放流魚が採捕されるまでには約3年掛かるので、自然海岸におけるキジハタの移動等について明らかになるのは、今後である。

### (3) 資源管理

2011年に刺網漁業管理部会で、放流による漁獲量は確実に増えてきており、更なる漁獲量・漁獲金額増大のためには、再放流が必要である旨、助言を行った。漁業者と意見交換した結果、25cm以下の小型魚は再放流することが決められた。これは、品質のよい「魚庭の魚」のイメージアップとして有効な取り組みでもある。

キジハタ、種苗放流、種苗生産、資源回復、資源管理